

平城宮跡資料館来館者を対象とした展示評価調査と都城関連遺跡展示の現状と課題

1 はじめに

奈良文化財研究所では2013年度受託事業の一環として、国土交通省が計画している「平城宮跡展示館」詳覧ゾーンの展示検討をおこなった。本稿では、検討のために実施した展示評価にともなう調査と、類似展示施設の類例調査で、あきらかになった知見の一部を報告する。

2 展示評価

展示評価とは、博物館展示の開発プロセスにおいて各種調査をおこない、展示の有効性などを検証することである。展示を企画・制作する際には、展示評価の知見を実際の展示計画にフィードバックすることが重要であり、利用者の視点も反映することができる。ここでは、平城宮跡資料館の来館者に実施した平城宮跡展示館詳覧ゾーンに関する企画段階評価の調査について述べる。

平城宮・京に関する認識 まず、平城宮・京に関する用語の理解度を測るために、「大極殿」「宮殿」「官衙」の意味と「平城京と平城宮の違い」についてインタビュー調査したところ（図 I-105-①）、各施設の具体的な機能についての理解度は低かった。「平城京」は宮のまわりの「都市」という認識があるが、「平城宮」は「建物」など漠然としたイメージしかもっていないことがわかる（図 I-105-②）。

次に、平城宮・京がどのような場であったか具体的に理解しているかを調べるため、図 I-105-③に示した10項目を宮内か京内かに振り分けてもらう方法で、調査をおこなった。集計をみると、「大極殿」「天皇のすまい」



図 I-104 展示評価インタビュー調査のようす（遺物写真カード選び）

は宮、「庶民の家」「市場」は京、と正しく認識しているが、「貴族の邸宅」が宮にあり、「役所」が京にあると誤解する傾向にある。これは、回答者が「高貴ならば宮」、「庶民的ならば京」という判断をしているように見受けられる（図 I-105-④）。また、平城宮の正門であり平城宮跡展示館予定地に隣接する「朱雀門」が、宮・京どちらに属するか把握していないケースも多い。宮と京の機能や、各エリアの配置や位置関係が把握できるとともに、そのなかで展示館（現在地）がどこにあるのかわかるような展示が必要であるといえる。

遺物（展示物）に対する興味・関心 平城宮・京から発掘された「出土遺物」のどのようなところに興味をもつのか調査した。遺物写真カードを作成し、興味を惹かれるもの、惹かれないものを2つずつ選んでもらった（図 I-104）。「興味を惹かれる」遺物は回答者によって様々であり、「興味を惹かれない」遺物は「7. 檜皮」「18. 根巻石」が多数を占める（図 I-106-①）。惹かれる理由をみると、身近なもの（2. お金、17. 櫛、9. 4. 19. 文字、5. 14. 絵、5. 人）、知っているから実見したいもの（2、4）、大きく迫力のあるもの（6、10、20）をはじめ、珍しい・貴重、高価そう、きれい、古そう、デザイン・模様といった要素をあげることができる。惹かれない理由は、「何かわからないから」という回答が最多。しかし惹かれる理由にも「わからない（から見たい、知りたい）」をあげる場合がある。両者の違いを比較すると（図 I-106-②）、「何なのかわからないからこそ」興味が湧く」遺物は、形状や

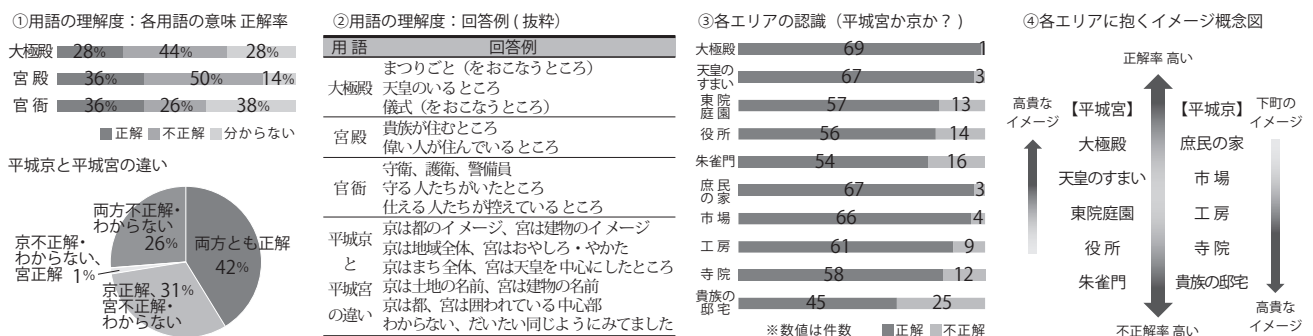


図 I-105 平城宮・京に関する認識

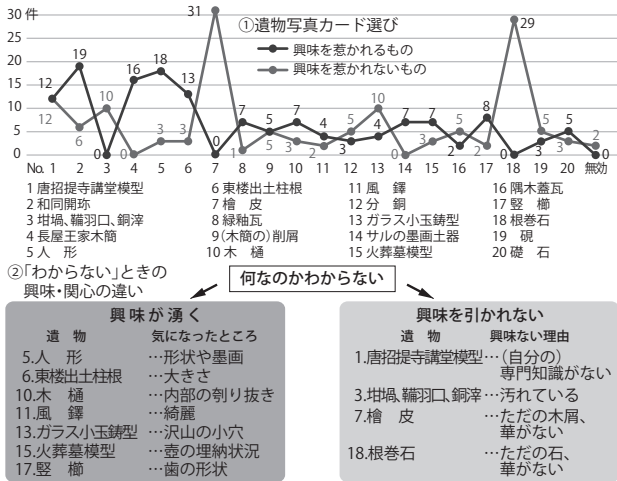


図 I-106 遺物(展示物)に対する興味・関心

見栄え、状態などに目立つ特徴があり、それがフックとなり興味を惹くことがわかる。逆に7や18などの見た目の印象が弱い遺物は、入館者が関心をもつよう、展示の視点や切り口、見せ方を工夫する必要がある。

平城宮跡を特徴づける遺物の一つである「木簡」については、秋期特別展「地下の正倉院展-木簡学ことはじめ」を利用してアンケート調査をおこない、木簡の何が印象に残り面白かったのか、その要素を整理した(表I-14)。1・2では、木簡に書かれた文字や内容から、当時の人々の実態がリアルに伝わることに面白さを感じている。3～5は、それまでの「木簡」に対するイメージが覆された(3:多様な種類や用途がある、4:平城宮跡から大量に出土している、5:状態が良好なものは墨書が鮮明にみえる)ことによる、驚きや感心の感情といえる。6・7は、出土状況や研究方法など、木簡そのものだけでなく関連する周辺情報にも興味を抱いていることがわかる。

来館者の見学パターン 来館者の見学動線を把握するため、平城宮跡資料館の遺物展示室(遺物展示コーナー)において来館者の行動観察調査をおこなった。見学動線をみると、展示室すべては見学せず、目についたコーナーをエリア区分(テーマ展示エリア/研究室エリア)に関係なくジグザグに見学するW型が多い(図I-107)。このような見学パターンは、展示室の形状やレイアウトも影響していると考えられる(細長い展示室の両側でエリアが分かれる、途中で別エリアへの移動を誘発する目立つ「造営露出

表 I-14 木簡に関する興味・関心

項目	回答内容・回答例
1.(書かれた)文字	字体、字の特徴、自分流の飾りなさが親しみを覚える、今と同じ字を使っている
2.(書かれた)内容	租税の実態、(当時の)人々の苦勞や遊び心、長屋王のこと、木簡での生々しいやりとり
3.木簡の種類・使い方	何度も字の練習している(習字)、削って書くこと、付札、種類がたくさんあったことに驚いた
4.(出土した)数の多さ	ものすごくあるのにびっくりした、これだけまとめて木簡を見たのははじめて
5.(現在まで)残っていること	(1300年前の)文字が消えずに残っている、木(木簡)が腐らずに残っている
6.木簡の出土状況	1800点が出てきた穴の大きさがわかりやすかった、木簡出土土坑の遺構断面の展示
7.木簡の研究	発掘調査、木簡の解説の苦労、記帳ノート、木簡の保存
8.実物(を見られたこと)	「本物」を目の前で見られたこと、レプリカではなく本当の木簡を見られて感動

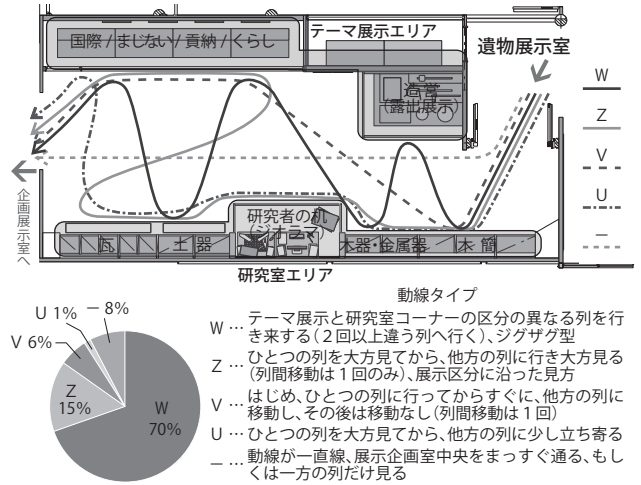


図 I-107 遺物展示室における見学動線

展示」や進路を分断するコーナー「研究者の机」がある等)。

展示解説の見方を調べるため、夏期企画展「平城京どうぶつえん」(本書74・75頁)では、壁面解説(図I-108-①)のない期間・ある期間を設定し、来館者の反応を調査した。壁面解説のない期間に実施した調査では、詳しい解説は「ない方がよい」「なくても大丈夫」と答えた回答が68%(アンケート調査)、「不要」が79%(インタビュー調査)であった。解説を不要とする回答をみると、①解説を読むことにストレス(難しい、時間がかかる、義務感)を感じる、②(解説を読まなくても)展示をみるだけで楽しめる、③(解説がない方が)自分自身で好きなように考えたり想像してみることができる、④解説以外の手段(ガイドに尋ねる、調べる等)がある、という理由を挙げている。また、壁面解説がある時のアンケート調査で25%、インタビュー調査で50%、行動観察調査では44%の人が、解説を読まない。解説を「読んだ」と答えた人でも、印象に残った解説内容を尋ねると、アンケート調査では「無回答」、インタビュー調査では「覚えていない」という回答が多い(図I-108-②・③)。来館者は、展示解説を目にはするが、内容はあまり記憶に残っていないことがわかる。行動観察でも、遺物をみてから気になった場合のみ、選択的に解説を読む光景がみられた。展示者側のメッセージを伝えるには、文章解説に頼り過ぎずに来館者の理解を促す方法を考えなければならないであろう。

(渡邊淳子・黒岩啓子 / Learning Innovation Network)

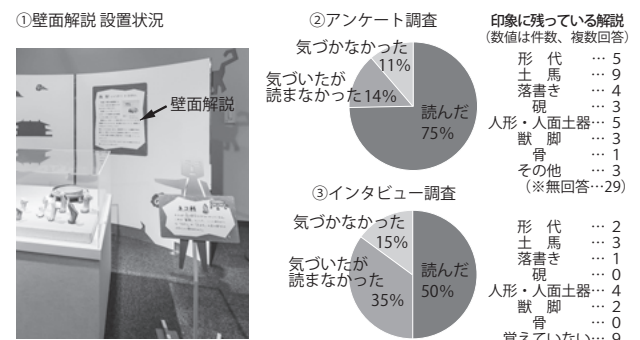


図 I-108 展示解説の見方

3 都城関連遺跡展示の調査

国内外の都城や官衙遺跡に関する展示を調査し、そこでの考古遺物の展示の現状と、課題を浮き彫りにすることが目的である。調査対象とした展示は2013年度下半期に開催されていた10件である（表 I-15）。平城宮跡資料館で課題と考えられる、（1）遺物の少ない宮中枢部の展示手法、（2）宮域と京城の区別、（3）主要出土遺物の展示手法に関して現状と課題を述べ、海外の類似施設の状況にも触れる。

宮中枢部の展示手法 都城における宮中枢部、大極殿や内裏の発掘調査では、場の性格から出土遺物が必ずしも多くない。このような場をどのように展示で表現するについて、施設③と施設⑥は対照的である。前者は豊楽殿や内裏での出土遺物をまとめて展示している。これらは、瓦、建築部材、土器、地鎮具などであり、平安宮豊楽殿や内裏がどういう場であったかについては簡潔な文章解説にゆだねられている。一方、後者は原寸大のジオラマや模型を切り口として、大極殿や内裏がどのような規模で、何に使われたかを視覚的に表現する。遺物はトピックに即して展示され、中枢部で用いられたものがまとまっているというわけではない。双方を考えあわせると、出土遺物から宮中枢部という場の性格や規模を端的に語らせることは難しいため、どうしてもグラフィックや模型、文章など別の材料によって補完せざるをえないが、出土遺物をメインに据えた展示で“中枢らしさ”を表現する余地はもう少しあるのではないだろうか。

「宮」と「京」の区別 展示評価に関する調査で浮き彫りになった、平城宮・京の理解度の状況をふまえて、各施設で「宮」と「京（都市部）」の展示分けについて調査した。施設①、③、④、⑥では、展示内容に宮と京（施設①では「城内」「城外」）の双方を含み、出土遺物をおおまかに宮・京にわけてみせる傾向にあった。ただし、宮・京の全体像の表現方法によっては、眼前の展示物が宮・京いずれのものなのかの識別が難しいと思われるケースが目立った。京の展示内容は、そこでの人々の暮らしがうかがわれるような生活関連遺物を軸とする傾向が強いが、他にも、「手工業生産」「寺院」（施設⑥）、「市」（同④）、「祭祀」（同①、③、④、⑤）などの切り口もみられる。ただし、生活関連遺物や祭祀具をはじめ、宮と京で共通す

表 I-15 調査施設一覧

調査施設	調査対象展示	展示内容
① 東北歴史博物館	常設展	多賀城
② 斎宮歴史博物館	常設展	斎宮
③ 京都市考古資料館	常設展 H25 前期特別展示	平安宮・京
④ 向日市文化資料館	常設展	長岡宮・京
⑤ 奈良市埋蔵文化財センター展示室	H25 秋期特別展	平城京
⑥ 大阪歴史博物館	常設展	難波宮・京
⑦ 九州歴史資料館	常設展	
⑧ 大宰府展示館	常設展	大宰府
⑨ 鴻臚館跡展示館	常設展	鴻臚館
⑩ 大韓民国・国立慶州博物館	常設展	新羅王京

る要素が多いことは留意すべきである。展示において宮と京を明確に展示分けするのであれば、その両者の間で来館者が漠然とした既視感を感じないような見せ方の工夫が必要だろう。

主要出土遺物の展示手法 都城や官衙遺跡における主な出土品である瓦、墨書土器、木簡の展示手法をみると、瓦は軒丸瓦・軒平瓦の上下組み合わせや軒先の一部復元、墨書土器は役所名や人名を記した資料の集合、木簡は書き下し文を記した題箋との並列が非常に多い。表 I-15 にあげた施設以外でも、古代の展示では同様の手法がとられるケースが散見される。都城や官衙遺跡から出土する遺物は同種の遺物間での個体差を感じ取りにくく、その遺跡の特性が何であるのか、より強く印象に残るような展示手法を検討しなければならないと考える。

韓国における都城展示 施設⑩では、平城宮跡と同時代の都城・新羅王京を扱った展示をおこなっているが、当該展示室のテーマ設定が「新羅の隆盛と滅亡」とあるように統一新羅時代の文化全体を扱っており、日本の都城遺跡展示の切り口とは大きく異なる。王陵や石碑など、王に焦点をあてた項目が目立つのも特徴である。王京の全体像は大型の模型により把握できるが、瓦や土器をはじめとする王京出土品は様々なコーナーに分散しており、王京との関連づけがやや難しい。（中川あや）

4 おわりに

本年度は、平城宮・京に関する認識や遺物に対する興味・関心、見学パターンなど来館者に関する基礎的なデータを得るとともに、他の展示施設の視察調査をおこない、都城遺跡の展示の現状や課題と考えられる事項を見出した。これらの調査で得た見解や認識をもとに、次年度以降も引き続き、展示計画の各段階で調査を実施し、展示案の改善を重ねていきたい。（中川・渡邊）